関西大学学術リポジトリ
Kansai University Institutional Repository

牛深と遊廓―歴史、地理、経済を中心に―

著者	亀井 拓
雑誌名	周縁の文化交渉学シリーズ8 『天草諸島の歴史と現在』
ページ	217-232
発行年	2012-03-31
URL	http://hdl.handle.net/10112/6231

第３章　牛深と遊廓

――歴史、地理、経済を中心に――

亀井　　拓

はじめに

本稿では天草市の牛深に存在していた「遊廓」[1] について詳しく述べたい。

遊廓を研究した著作は多くあるが、江戸や京都など比較的有名なものが中心である。小規模に分類され、あまり知られていない牛深の遊廓についての調査・研究は、天草郷土史を研究しておられる鶴田文史氏の著作[2] や、山下義満氏の牛深港研究[3] の中で取り上げられてはいるが、いずれも遊廓だけをピックアップして論じられているわけではなく、地域史研究の一部分として登場している。

一方、遊廓の歴史的研究では、「性」というキーワードを通して、古代から昭和初期まで時系列に著した高橋桂二氏の『日本性生活史』[4] や、女性の側から問題に取り組んだ金一勉氏の『日本女性哀史』[5] などがあるが、後者は女性が抑圧されたことを特に強調しすぎているきらいがある。本稿はこれらの先行研究を踏まえて、どうして牛深に遊廓があったのか、そしてその遊廓はどのような存在であったのか、という点を考察し、可能な限り中立的で広い視点から牛深の「地域」研究と「日本史」研究を結び付けることを目標としている。

牛深に遊廓が存在していたことを知った契機は、フィールドワーク参加中にボランティアガイドである吉川茂文さんの説明を聞いたことだった。吉川さんはスライドを使って紹介して下さったのだが、そのとき筆者が最初に感じたことは、一般的には都会にあるものがどうしてこの漁港に存在したのだろうかという疑問であった。それ以降、吉川さんや同じくボランティアガイドの杉浦龍馬さん、そして牛深調査１日目（７月27日）にわれわれのインタビューに応じて下さった地元の漁師さんである浅見康行さんや、加世浦区長である鯖江要さんに尋ねたのである。本稿ではそのとき伺った内容も紹介させていた

1）遊廓とは国が公に定めた区域内で、公に認められた売春婦（公娼）を雇って営業する店郡、もしくはその指定された区域のことを指す。遊廓には「遊里」「花街」「くるわ」など多くの呼び名があるが、本稿では特別な事情がない限り「遊廓」に統一する。明治12年（1879）に創刊された『朝日新聞』の同年２月６日号の記事に「遊廓」が使われており、明治期にはすでに用いられていた名称であった。

2）鶴田文史（編著）『西海の南蛮文化探訪　天草五足の靴物語　――評の熊本編・雅の京都編――』（近代文芸社）2007年７月や、鶴田文史（編著）『天草潮深のふるさと』（牛深歴史文化遺産の会）2007年８月など。

3）山下義満「牛深港の「みなとの文化」」、http://www.wave.or.jp/minatobunka/archives/report/109.pdf（みなと文化研究事業）2010年５月

4）高橋桂二『日本性生活史』（春秋社）1931年３月

5）金一勉『日本女性哀史　遊女・女郎・からゆき・慰安婦の系譜』（現代史出版会）1980年６月

だくが、話者と聞き手という立場の差や世代の差、生活圏の違いなど、知り合って間もない方々とのやり取りであったため、真意が相互に伝わらずに誤解が生じている可能性は否定できない。そのため本稿では平衡性を保つため、インタビューの内容をそのまま振り返るのではなく、牛深の状況を把握するために必要な情報を紹介したい。

加えて、遊廓や売春といったテーマは感情論になりやすく、価値観が反映されやすい。そのため本稿は可能な限り中立的な表現を用いることを心掛ける。

１．近世～近代の遊廓

遊廓の制度が完全に整えられたのは江戸時代の開始と同時期である。もちろんそれ以前から遊廓やそれに準ずるものは存在した。以下で詳述する家康の作った制度も豊臣秀吉の制度を手本にしており、また奈良時代に売春[6] 婦が存在した記録もあるようだが、江戸時代より前の状況を時系列的に紹介することは本稿が追及するものではなく、古代の「売春」は今日のわれわれが意味する売春とは大きく異なり複雑であるため、これ以上論じない。

家康は天下を統一する以前から諸大名が自分に反旗を翻すことを恐れ、彼らの経済力と反抗心を抑えることに苦心した。そのひとつが大阪夏の陣のすぐ後から始められた「公娼保護政策」であった。江戸幕府が開かれると、売春婦を取り締まるべきだとする意見に家康は、「〔遊女や湯女を大いに奨励して、全国の武士たちが〕諸国はおろか、京、大阪にもない楽しみを江戸でできると思い、喜び勇んでやってくるようにしなければならぬ」[7] と答え、公に認めた売春婦（公娼）を利用して、諸大名が放蕩に耽るように仕向けた。その後、主要道の各所に遊廓をたくみに配置し、参勤交代の費用に遊廓での出費を含ませるようにした[8]。こうして幕府への反抗心を抑制し、相対的に自分の地位を向上させたのである。まさしく兵法三十六計の「美人計」である。

遊廓は高級武士のために設置されたのであった。彼らの相手を務めるには漢文や作詩の才など高い教養が必要であった。多芸で多趣味の女性が彼らの相手をしていたため、のちに遊廓は高級な社交場となり、そこから浮世絵や歌舞伎、浄瑠璃など江戸文化が生まれた[9]。ちなみに明治維新後には英語を学ぶ者も現れ、いつの間にか常連客よりも上手に話せるようになったケースもあったそうである[10]。女子教育がそれほど重視されていなかった時代、遊廓に身を置く彼女たちは一方でかなりのエリートでもあったのだ。

その後遊廓は地方にも広がり、徐々に町民や豪商などが通うものも作られるようになった。こうして「好色や売色が鼓舞され、廓風景を美化〔し〕〔中略〕、やがては“江戸文化”の粋のように思われ〔中

6）「売春」という語は第二次世界大戦後の「売春防止法」制定に向けた動きの中で、「売淫」という語に代わって登場し、徐々に定着していった（曽根ひろみ『娼婦と近世社会』〔吉川弘文館〕2003年１月、p.11参照）。

7）豊浜紀代子『娼婦のルーツをたずねて　――京都、そして江戸・大阪――』（かもがわ出版）2002年６月、p.95

8）金（1980）第一章参照（p.7-40）

9）西山松之助（編）『日本史小百科　遊女』（近藤出版社）1985年３月、p.12-13参照

10）明田鉄男『日本花街史』（雄山閣）1991年３月、p.151-152参照

略〕、〔遊廓通いが〕できない者は「甲斐性のない男」、「小心者」と見くびられるまでになった」[11]。江戸時代が進むにつれてそこはなにか特別なところでも、現在でいう不健全な場所でもなくなり、その根拠に江戸時代において遊廓で働いていた女性との結婚は一般的に行われていた。また幕末の志士たちが国事を論じた場所は料亭や遊廓であって、歴史上の有名な人物である木戸孝允の夫人や、遊廓好きで有名な伊藤博文の二番目の夫人は芸妓であったことから、遊廓で知り合った可能性が高い[12]。

明治政府も例外なく遊廓を利用した。迫り来る外国人の防波堤として外国人用遊廓を莫大な補助金を出して開設したり[13]、新たな設置許可の条件として会津討伐の軍用金の献納を要求したりした[14]。そして戊辰戦争を皮切りに日本全国に遊廓がより広がり、日清戦争を境に軍隊と遊廓は切っても切れない関係になった。

例えば長崎県の佐世保市は明治22年（1889）に海軍の鎮守府が置かれたのと同時に発展し、一漁村だったのが15万人を超える人口になった。それにともなって明治26年（1893）には勝富遊廓が設立され、のちに花園遊廓も設置された[15]。

遊廓業者も、日露戦争期には出征兵士の慰安と称して、戦勝後や朝鮮併合後は日本の成功を祝うと称して大々的に宣伝して繁栄した。公娼の数も明治17年（1884）には合計28,432人だったが、大正13年（1938）には52,256人と約２倍に増加しており、日本の対外進出や近代化と遊廓業は表裏一体となっていたことが窺える[16]。そして急速に欧米化、資本主義化していく社会の底辺にいた労働者の不満のはけ口にも利用されていた[17]。

どれほど日本の遊廓が一般に広がっていたかが分かる面白いエピソードがある。明治期、遊廓業者の外国人に対する宣伝があまりにすさまじく、写真付きのポストカードを通して視覚的に情報が世界に広まったため[18]、「吉原」や「芸者」という名前が現在でも世界的に有名な日本語となっているが、当時日本の高官であった吉原さんが外国へ出かけたとき、名前を聞いただけで相手が真面目に対応してくれな

11）金（1980）p.20

12）同上書、p.86参照。金氏によれば坂本龍馬とお竜の出会いも遊廓と関係があったようだが、お竜は騙されて遊廓に売られた妹を単身救出に行くほどの人物であり、そのような事実は考えにくい。しかし坂本龍馬が遊廓に出入りしていたことに関しては事実である（阿井景子『龍馬と八人の女性』〔戎光祥出版〕2005年４月、p.110-118, 162-164参照）。

13）豊浜（2002）p.122参照

14）高橋（1931）p.296参照

15）日本遊覧社『全国遊廓案内』（日本遊覧社）1930年７月、吉田昌志（編）『遊廓と売春』（ゆにま書房）2008年１月収録、p.437-439（p.443-445）参照

16）金（1980）p.122-129参照

17）同上書、p.272。遊廓に行けた労働者はやはりある程度お金を持った人である。本当に貧しい労働者は私娼（非公認の売春婦）などのもとに走った。

18）清朝中国において風習となっていた「纏足」（女性の足を幼いときから縛って小さくした風習。清末には足の小ささを競うファッションショーが女性主催で行われていた。なお法的には禁止されてはいた。）が絵付きポストカードを通して西洋列強の人々に知られ、中国の野蛮性をイメージさせる作用として働いた（坂元ひろ子『中国民族主義の神話　――人種・身体・ジェンダー――』〔岩波書店〕p.154, 159-160, 166-169参照）。同じように遊廓という現象を利用して日本の野蛮性をヨーロッパ人は主張した。

かったそうである[19]。

また大正期の日本の遊廓について、日本へ行った時のことを中国の小説家魯迅の弟である周作人が、大正８年（1919）に当時中国で一番よく読まれていた啓蒙雑誌である『新青年』に文章を投稿しているが、その中で以下のように書いている。

> 新吉原遊廓の夜桜や島原の太夫道中（太夫はTayuと読み、本来は芸人の総称であったがのちに遊女を指すようになった。遊廓は古いしきたりで毎年太夫は着飾ってあたりを一周する。これを道中と呼ぶ）はその場所の風流になっており、詩人や小説家、画家たちの賛美が尽きることはない、実に不可解なことだ[20]。　（筆者訳・下線部も筆者による）

このように当時遊廓は日本社会の中に溶け込んでいただけでなく、海外でも広く知れ渡っていた。親のために身を売るのは「親孝行」だと世間で評され[21]、日本政府もやむにやまれない理由で制限を加えることは幾度かあったが、基本的に遊廓を援助し続けた[22]。これらから分かるように、遊廓は国家政策やナショナリズムと大きく関わっていたのである。

確かに「救世主」や「廓清会」などによる廃娼運動は行われていた。しかし今日のわれわれが抱くような不潔なイメージだけで、当時の遊廓を捉えることはできないのである。もちろん遊廓がどこでも受け入れられていたわけではない。例えば後述の肥後藩は遊廓営業に対して厳しかった。しかしこれは同藩で売春があまり行われなかったことを意味するのではない。

２．牛深の遊廓

牛深の遊廓[23]は古久玉（こくたま）に存在した。表１のデーターは天草郷土史を研究しておられる鶴田文史氏の成果を引用したものである。これは『熊本県統計書』を根拠としているため、この数字は公的に営業が認められていた店と娼妓（公娼）の数である。このほか法的に認められていない私娼や闇営業があったであろうことを考慮すれば、もっと多くの店が存在していたと考えるのが妥当であろう。

一時期を除いて天領（幕府直轄領）であった天草は、明治元年（1868）に単独の県になり、その後紆余曲折を経たのち、明治６年（1873）に現在の熊本県と同じ行政範囲をもつ白川県に組み込まれる（明治９年〔1876〕に「白川県」から「熊本県」に改称）[24]。

19）金（1980）p.137参照

20）周作人「游日本雑感」、『新青年 LA JEUNESSE（影印版）』第６巻第６号（青年雑誌社）1919年11月、p.609-610（p.686-687）。原文は省略する。

21）高橋（1931）p.298参照

22）例えば警察は、売春業を辞めようとする女性たちを保護する義務があったにもかかわらず、彼女らを説き伏せて働き続けさせた（金〔1980〕p.297-306参照）。

23）牛深では遊廓のことを「料理屋」と称した（山下〔2010〕p.109-14）。

24）平野敏也、工藤敬一（編）『図解　熊本県の歴史』（河出書房新社）1997年11月、p.161の図版参照

表１　牛深の遊廓・娼妓数

明治	貸座敷（戸）	娼妓（人）
15年	12	44
16年	3	80
17年	2	94
18年	4	77
19年	4	66
20年	9	75
21年	9	77
22年	8	69
23年	8	89
24年	9	88
25年	10	81
26年	10	88
27年	10	72
28年	10	56
29年	10	71
30年	13	78
31年	19	93
32年	17	87
33年	21	68
34年	20	64
35年	17	45
36年	4	21
37年	4	7
38年	3	15
39年	3	14
40年	3	2
41年	4	39
42年	4	31

鶴田文史編著『天草潮深のふるさと』（牛深歴史文化遺産の会）2007年８月、p.333

遊廓営業に厳しかった肥後藩の行政を引き継いだ白川県は肥後藩の遊廓厳禁政策を継続し、売春を禁じる法令を数々発布した[25]。しかし明治７年（1874）１月25日に京町で遊廓設置が許可された[26]。これは隣接県の遊廓が熊本県民のお金を吸い取る状況があったため、熊本県としても許可せざるを得なくなったためだと考えられる[27]。

牛深については、同年の１月27日に布達二三号が布達され、これによって牛深にも設置が認められた[28]。なにもなかった場所に突然遊廓の設置が認められるようなことは考えにくく、当初からそれなりの

25）法令に関しては、新熊本市史編纂委員会（編）『新熊本市史　通史編』第６巻　近代Ⅱ（熊本市）2001年３月、p.393-396に紹介されている。

26）新熊本市史編纂委員会（2001）p.396参照

27）遊廓が乱立したため岐阜県では一旦営業を禁止したが、県民が他県で浪費し、岐阜県の税収が減ったために再認可した、という事例がある（金〔1980〕p.116）。

28）新熊本市史編纂委員会（2001）p.398参照。これにより熊本京町、八代、牛深に遊廓が設置され、明治21年に三角でも認可された。

「中心地」であった場所を認可したと考えるのが妥当である。残念ながら私娼の数を正確に知ることは困難だが、少なくとも同年９月の統計に基づけば、４軒の遊廓が許可されたようである[29]。

それ以降の牛深の遊廓については表１のデーターに基づけば、徐々に遊廓数が増え続け、明治31～35年（1898-1902）の17～21戸をピークに日露戦争の前年である同36年（1903）から激減し、以降３、４戸を続けている。日露戦争後の明治40年（1907）に牛深を訪れた北原白秋、平野萬里、太田正雄、吉井勇、与謝野寛のいわゆる「五足の靴」が以下のように当時の牛深の遊廓について記している。

> ただ三軒のみで、暗き灯、疎なる垣、転た荒涼の感に堪えなかった。上の家に桔槔の音が聞えて、足下に蟋蟀が鳴くなどは真に寂しい[30]。

なぜ日露戦争直前の明治37年（1904）に突然遊廓と娼妓の数が減ったのであろうか。それは「朝鮮半島への進出」と「出稼ぎ」に関係がある。日本の対外進出と平行して、朝鮮半島に渡った日本人のための遊廓が居留地に建てられるようになり、日本人女性だけでは人手不足だったため「朝鮮人」も遊廓にいた[31]。もちろん利用者は「日本人」が多かったが、家康が遊廓を用いて相手を弱体化させ、相対的に自分の地位を向上させたのと同じように、現地の人々の反抗心を削ぐ作用も遊廓は果たした[32]。日清戦争後から朝鮮は「からゆきさん」の目的地・中継地となり、日露戦争後には下関の売春婦たちが次々と朝鮮へと渡っていった[33]。このため日本国内の遊廓で働く者の人数が減少したため、田舎の遊廓はより儲かる都会へと進出していったと考えられる[34]。静岡のある遊廓では、「異国情調を深くするために〔中略〕娼妓には、土地っ子に耳なれぬ言葉の天草女、或は四国の徳島あたりから抱へて来た」[35] そうである[36]。牛深の遊廓業者が積極的に都市へ移動したことは十分考えられる。牛深の遊廓と娼妓の数が日露戦争前に突然減少したのは、戦争前の禁欲的雰囲気のせいではなく、遊廓経営者が都市にビジネスチャンスを見出したためだったと考えてよいだろう。

その後の牛深遊廓についてであるが、昭和５年（1930）に出版された全国遊廓ガイドブック[37] による

29）同上書、p.398参照

30）五人づれ『五足の靴』（岩波文庫）2008年５月、p.55

31）川田文子『戦争と性　――近代公娼制度・慰安所制度をめぐって――』（明石書店）1995年４月、p.77-79参照

32）満州などでも現地人向けの遊廓が同じ理由で建てられた（金〔1980〕p.222, 224-225参照）。

33）金（1980）p.219、p.221-222参照

34）日本遊覧社の『全国遊廓案内』を参照し、書かれている各地の値段を比較・推測してみると、場所によって料金の設定方法が異なるため、単純比較が非常に難しいのだが、筆者が見た限りでは、それほど値段自体に大きな差はなかったように感じた。しかし集客率を考慮すれば経営者としては都会の方が魅力的であっただろう（日本遊覧社〔1930〕参照）。

35）中山太郎『売笑三千年史』（春陽堂）1927年12月、p.667。漢字は常用漢字に改めた。

36）「天草女」に関するイメージや、からゆきさんについては、同書佐藤トウイウエン氏の「「孝」に殉じた天草の「からゆきさん」」を参照。

37）日本遊覧社の『全国遊廓案内』（1930年出版）を参照。ここでは牛深の遊廓のことを「中深遊廓」と表記してある。これが印刷ミスなのか著者の書き間違いなのか、本当に当時中深遊廓と呼ばれていたのか不明だが、「熊本縣天草郡」

と、当時牛深に４軒の遊廓があったと説明しているが、説明はわずかに３行で、他の遊廓紹介と比べてかなり短い。つまり牛深の遊廓は全盛期より衰退してしまい、細々と営業を続けていったことが分かる。太平洋戦争が近づくにつれ、全国的にそうであったと考えられるが、牛深の遊廓は次々と店を閉じた。しかし牛深の場合、戦後すぐに４軒が復活をしている[38]。

３．牛深の歴史地理と経済

これまで遊廓について、具体的には牛深の遊廓について総覧してきた。それではどうして牛深に遊廓が存在していたのだろうか。前述した通り、江戸時代以降の遊廓は主要道の各地に配備され、高級武士を相手に商売をしていた。それが全国に広がることによって明治以降には労働者などより多くの人が出入りするようになった。遊廓の政治的・社会的な面はすでに述べた通りであるので、次に牛深に遊廓があったその地理的・経済的要因について詳しく述べ、そしてこの遊廓の存在を支えた文化面について触れる。

〔地理と環境〕

牛深とはどういう場所であったのだろうか。アビラ＝ヒロン[39]の『日本王国記』にはこうある。

> 実によく囲まれているので、いったんその中へはいると船をそこなう風もないくらいである。つまり、小さいうえに、入口がひどく狭いのである。〔中略〕〔牛深の港〕はどういう船にも向く良港である[40]。

この記述から牛深は「天然の良港」であることが西洋人にも古くから知られていたことがわかる。

江戸時代の天草諸島で商業が発達したのは富岡町、町山口村（現、本渡）そして牛深村であった。行政の中心地として富岡町（のちに地理的中心である町山口村に移動した）、そして漁業と海上輸送の中継地として牛深村が発達した[41]。牛深は天草下島の最南端に位置し、鹿児島から長崎へ行く中間地点に位置している。立地がよく、しかも良港であった牛深港は江戸時代からすでに交通輸送の経由地になっており、漁船が嵐などを避けるためにももってこいの場所としても名が知られていた。そのため薩摩藩士が海路で京都に向かうときも牛深を通っていた。

文政年間（1818-30）には天草郡一の人口を抱え、安政３年（1856）当時「定浦制度」のため漁業制限

や「三角港から汽船に依つて」とあり、状況から考えて牛深のことを指しているのに間違いない。

38）鶴田文史（編著）『天草潮深のふるさと』（牛深歴史文化遺産の会）2007年８月、p.333

39）イスパニアの貿易商人で生没年不詳。文禄３年（1594）、慶長12年（1607）に来日し、以後元和５年（1619）まで滞在したとされている（竹内誠、深井雅海〔編〕『日本近世人名辞典』〔吉川弘文館〕2005年12月、p.24）。

40）アビラ・ヒロン『日本王国記』、佐久間正、会田由、岡田章雄訳（佐久間正、岩生成一、岡田章雄注）『アビラ・ヒロン　日本王国記　ルイス・フロイス　日欧文化比較　大航海叢書ＸＩ』（岩波書店）1965年９月収録、p.202

41）鶴田文史（監）『図説　天草の歴史』（郷土出版社）2007年12月、p.136参照

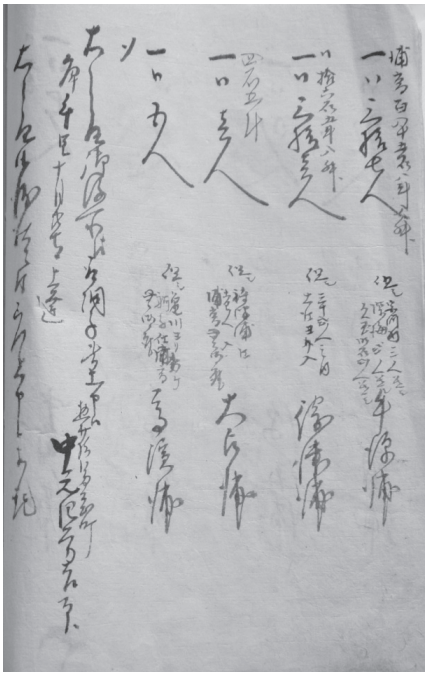

写真１　中元家文書

を受けていた中で、牛深は天草七ヶ浦のうち最大の港町であったと記されている[42]（写真１参照）。明治以降も天草は九州の西海域の海の重要地点として競争が激しいところであったが、その中でも牛深は複数の会社の船が寄港する場所であった[43]。同時に無数にあった天草の港の中で、富岡、本渡、そして牛深の３つ以外は漁港化してしまった[44]。ここから分かるように、牛深は天草の中でも重要な寄港地であり、経済的にも自然環境的にも貿易港として生き残る条件の整った恵まれた場所であったのである。

天草は全体的に平地が少なく、牛深も例外ではない。つまり農業が限られていたからこそ積極的に海を利用するようになったという背景も関係しているであろう。

〔漁業と商業〕

現在、牛深港は熊本県唯一の第三種漁港に指定（昭和23年・1948）されている県内最大の漁港である。発掘調査によると牛深には旧石器時代から漁業を中心とした人々が住んでおり、牛深と漁業の歴史は非常に古い[45]。しかし江戸時代になるまでは一つの小さな漁村にすぎなかった。享保（1716-1736）頃になると緒方惣左衛門がカツオ一本釣漁を創業したのに始まり、その後深川家によって発展し、結果的に牛

42）下中邦彦（編）『日本歴史地名大系第四四巻　熊本県の地名』（平凡社）1985年３月、p.895。原典は苓北町漁業協同組合所蔵中元家文書「天草郡中舸子控帳　裏方稼場取調子并高浜鰯仕立ニ付引合扣　一切永代萬覚心得日記荒方書状扣　富岡浦方」。2010年関西大学天草フィールドワークで調査済み。

43）濱名志松『天草の海上交通史』（自費出版）1997年１月、p.48-51参照

44）寺本広作（編）『熊本県史』近代編第一（熊本県）1961年３月、p.587参照

45）山下（2010）p.109-４

深は近海・遠海漁業基地として活況を呈していく[46]。そして文政５年（1822）の「諸国鰹節番附表[47]」には「世話方」のひとつとして挙げられるほど繁盛するようになる。

牛深は高い水揚げ量を誇る漁師町であったと同時に、カツオ節やニボシなどを生産する加工の町でもあった。それは住民だけでは魚を消費できず、生魚を運搬するにも船での輸送には時間がかかりすぎてしまい、魚が腐ってしまうからである。

17世紀末ごろになると牛深の庄屋は、生産されたカツオ節や干アワビなどを直接長崎奉行所に献上した[48]。また商業に関しても、江戸時代末期において「屋号名が天草の旧都富岡・新都町山口の百未満に対して牛深〔は〕〔中略〕百を越える数に登」[49]り、天草でも屈指の町であった。そして牛深で生産されたカツオ節などの加工品は弁才船[50]によって遠隔地に運ばれた。時代は下るが、昭和初期の牛深産ニボシは大阪のうどんの出汁に使用されており[51]、関西大学がある大阪と牛深はとても深い関係にあったともいえる。このように牛深は漁業、加工業、問屋の３つが一体となった天草諸島で一番繁盛した町であった。

また、江戸時代の弁才船は日本各地を行き来していたため、牛深には遠くの地から多くの船乗りたちがやってきた。この遠隔地との交流を通して、牛深発祥のハイヤ節が日本全国に広がっていった。このハイヤ節は牛深に遊廓が許可される明治以降、遊廓内でも行われたようである。地元牛深の船乗りの心を癒していたハイヤ節は江戸時代に牛深を訪れた人々、特に同じシンパシーを持っていたであろう他地域からきた船乗りたちに大うけし、彼らを通して徳島の阿波踊りや津軽のアイヤ節など、各地へハイヤ節系民謡が広がっていった[52]。

明治時代を迎えると庄屋が廃止され（明治３年・1870）、それまであった漁業に関する制限も廃止されたため、各地で自由操業がされるようになった。その後漁業は組織化され、さまざまな魚が漁獲される賑わった場所へと成長していった[53]。

戦後の牛深はイワシ漁で繁盛した。元漁師である加世浦区長、鯖江要さん（77歳）によると、イワシが大漁であった日は小学校も休校になり、現役マグロ漁師の浅見康行さん（69歳）によると、昭和33, 34年（1958, 9）ごろ、牛深にあった映画館の大人料金が30～40円であった時代に、普段の給料が7,000～8,000円、多いときで１万7,000円だったそうである。漁師や漁業関連の仕事はとても高給であったため、赴任してきた小学校の先生ですら漁業関連の事務職などに転職してしまったそうである。

若者も卒業と同時に漁業関係の仕事に就いた。例えば鯖江さんは中１の夏から、浅見さんも中学卒業と同時に漁業に従事されたそうだ。女子生徒も漁港の事務や加工場で働いたそうである[54]。しかしやはり

46）下中（1985）p.894参照

47）鶴田文史（編著）『天草牛深のふるさと』（牛深歴史文化遺産の会）2007年８月、p.113

48）浅香幸雄（監修）、岩本政教（著者代表）『熊本県の地理　日本地理集成Ⅲ』（光文館）1963年７月、p.300参照

49）鶴田文史（編著）『天草潮深のふるさと』（牛深歴史文化遺産の会）2007年８月、p.77

50）弁才船とは江戸時代における輸送船であり、より多く、より早く、そしてより少人数で運ぶことに特化した船のことである。この船によって都市では「バラエティーに富む消費生活が可能に」なった（「牛深海彩館」展示より）。

51）山下（2010）p.109-7

52）同上書、p.109-9 参照

53）寺本（1961）p.460-462参照

54）しかし漁師と結婚すれば夫の収入だけで十分生活できたため、結婚と同時に「寿退職」し、夫が漁に出ているとき

人手が不足していたため、甑島（鹿児島県）や魚貫（おにき）、大江辺りから出稼ぎ（季節）労働者が網元の家や加工場に住み込みで働きに来ていたそうだ。これほど牛深は忙しい港町であり、それは江戸時代から続く漁業の伝統を受け継いできたからであるといえよう。

〔港町として〕

これまで述べてきたことから分かるように、牛深は自然環境によく恵まれた天草随一の港町であった。そしてこの港町というのは牛深の遊廓を語る上で重要なキーワードである。天草の事例ではないが、肥後藩川尻町の状況を紹介したい。

港町では、官が主導となって積極的に遊廓がつくることもあった。その一例が肥後藩が歴史上一度だけ認めた遊廓である。取り締まりが厳しかった肥後藩であるが、宝暦年間（1751-64）から明和５，６年（1768，9）頃までの短い間、川尻町の柳堀での遊廓営業を許可した[55]。

川尻町は明暦元年（1655）には問屋、紺屋、小物屋、見世などがある商業の中心となって、元禄期（1688-1704）には緑川流域の中心的役割を担っていた。しかし宝暦頃から肥後藩は経済難に陥り、川尻町も危機に面した。そこで藩は経済政策として遊廓を許可することで川尻町の商業活性化を図り、同時に藩の税収も増やそうとした。薩摩街道筋上にあって港町でもあった川尻町は宿場町として、そして物の集合地点として発展した町で、そのような流動的な社会に遊廓が肥後藩主導でつくられ、長崎から公娼を呼び寄せるなど、計画的に遊廓を運営した[56]。

川尻町の遊廓と牛深の遊廓は時代も場所も異なるが、港町として共通するものがある。つまりモノやヒトが集まり、そして散らばっていく場所である港町の遊廓は、顧客の多くが地元民よりもよそからやってくる人々であり、長崎や近代以降であれば外国人が来る場合すらあった[57]。遊廓がそこにあること自体が町の活性化と繁栄に直接繋がっていたのである。そのため一般的に遊廓で働く女性は不浄な存在とされ、民族衛生的な観点からも、身体を弱体化させる性病を撒き散らす主体として排除・差別されていたが[58]、港町の場合、彼女らは地域の祭りに参加することが可能であった[59]。

港町の売春婦にはプラスイメージすらあった。沖縄の那覇にあった辻遊廓には、琉球王国時代の時の王様が、海からやってくる男たちが住民に手を出すことを防止するため、自分の娘たちに彼らの相手をさせたのがその始まりであるという伝説があり、また同じく港町である山口県下関の遊廓では、天皇に

は遊んだり、銭湯でくつろいだりしていたそうだ。しかしここには女性の視点が欠けている。男性が漁に出ている間の女性たちの本当の生活を女性にインタビューする機会に恵まれなかったことが残念である。

55）新熊本市史編纂委員会（2001）p.393参照

56）新熊本市史編纂委員会（編）『新熊本市史　通史編』第４巻　近世Ⅱ（熊本県）2003年３月、p.645-647参照

57）日本遊覧社（1930）p.440-442（p.446-448）の「長崎市丸山遊廓」参照。

58）今西一『遊女の社会史　――島原・吉原の歴史から植民地「公娼」制まで――』（有志舎）2007年10月、p.213参照。色情が民族を退化させ、性病の蔓延がヨーロッパに対抗できなくしている原因だとして公的売春に反対した賀川豊彦（1888-1960）の民族衛生観がよい例である（藤野豊『「いのち」の近代史　――「民族浄化」の名のもとに迫害されたハンセン病患者――』〔かもがわ出版〕2001年５月、p.118-123参照）。

59）渡辺憲司「港町の遊郭と遊女　――下関稲荷町を中心に――」、歴史学研究会（編）『港町の世界史③　港町に生きる』（青木書店）2006年２月、p.41。または日本遊覧社（1930）p.394（p.400）を参照。

写真２　「一夢楼」前にて

写真３　女相撲の衣装

仕えていた女官がその起源とされている[60]。このような国家と売春が関連付けられた伝承は日本の国家権力やナショナリズムに利用されたことはいうまでもないが、港町にいた彼女らに対して地元民は少なくともマイナスイメージだけで語っていなかったことが分かる。

では牛深ではどうであったのだろうか。写真２は大正期にはすでに開業していた牛深の一夢楼前で撮られたものであるが、彼女らは明治時代中頃から再流行した女相撲の姿をしている（別の場所で撮られた写真であるが、彼女らの服装を分りやすくするため、写真３も載せた）。

写真だけで全てを判断することはできないが、一般的に都会の遊廓街は柵で囲まれており、入り口を通らなければ中に入ることができず、そしてそこで働く女性たちは遊廓の外に出ることを法律によって禁止されていた[61]。しかしそんな時代に店の前で女相撲大会を堂々と開いていたことから考えて、また地元の伝統文化であるハイヤ節を牛深遊廓の名物として興じていたにもかかわらず、地元民が神聖な伝統文化を穢すとしてやめさせなかった点も考慮にいれれば、牛深の遊廓は他の港町の遊廓と同様、地元の人々はかなり遊廓やそこで働く彼女らに大らかであったことが想像できる。そしてこのような現象は、港町にとって遊廓が「来訪神（よそから来る人々）」を呼び寄せる役目を果たしていたためであり、牛深もその例外ではなかったのである。

私娼の場合は除いて、公娼に関しては基本的に地元ではなく、別の場所からきた女性たちが従事していた。建前上売春は「自主的に行うもの」とされていたため、年季奉公人として年季が満了すると彼女らは他の遊廓に移動していた。つまり地元の人にとって遊廓は他所からやってきた女性たちが一定期間そこで他所から来たお客の相手をする場所であり、人が集まることによって牛深の繁栄も維持されていたことから、地元民と遊廓業者はある意味 win-win の関係にあったと言ってよいだろう。

戦後、GHQ 指導による農地改革などによって地主やギルド的な徒弟制度が崩され、末端の人々の権利が保障されるようになったことで、貧しい労働者だった人もお金を持つようになった。もともと栄えていた牛深でも利益配分が良くなって、住民の中でも遊廓に出掛ける人が現れただろう。しかしそれは主

60）渡辺（2006）p.46, 48参照

61）昭和８年（1933）に内務省の「娼妓取締規則改正」によって遊廓の外に出られるようになった（明田〔1991〕p.160）。

に戦後の現象であり、もともとはビジネスでやってきた人や寄港した人、また旅行者などを顧客対象としていたのである。

〔小結〕

これまで江戸時代以降の牛深を、漁業を中心にその経済を鳥瞰してきたが、牛深は海洋資源に恵まれ、食べることには困らない必要最低限の生活が常に保障され続けてきた場所であった。表２から分かるように、天草は人口増加が最近まで続いた場所であったが、それをある程度まで支えることができる経済力が牛深にはあったのである。土地の狭い天草諸島に位置する牛深では大きな市場となることはできず、イギリスのリヴァプールのように都市を形成することもできなかった。だがマグロやイワシなど大量の水揚げ高をほこり、その水産物を加工して他地域と交易を行うことで町が活気付き、また経済的、地理的に重要な場所として江戸時代から認知され、船乗りたちや旅行で寄港した人などの宿泊場所などとして牛深は発展してきた。牛深はモノやヒトの流れが天草諸島内で特に激しい場所であったのである。第二次世界大戦中の昭和18年（1943）には写真４にあげているように、牛深は艦上戦闘機「牛深漁業号」を海軍に献納している。牛深は天草の中で特に発展した場所であって、地元には常に経済力をもった人たちが暮らしていたことが分かる。

一方遊廓というのは人の集まるところに建てられた。その意味において牛深は遊廓が置かれても全くおかしくない場所であった。確かに法律で認可されたのは明治７年（1874）だったが、すでに述べたとおり、それ以前から遊廓に準ずるものはあったと考えて問題ないであろう。牛深の伝統文化であるハイヤ節が、遊廓営業許可以前の牛深にあったであろう非合法売春宿で演じられていたかどうかは不明であるが、遊廓が江戸文化の発信源であったと同じように、お酒を飲みながら来訪者たちは牛深の文化に共感を覚え、そしてそれを地元に持ち帰ったのであろう。

加えて述べておかなければならないのは、天草内で遊廓は牛深にしか存在しなかったわけではない点である。明治15～17年（1882-84）に富岡で２軒、同15～18年（1882-85）に崎津で１軒遊廓が存在して

表２　牛深人口推移

	人数	男	女
天保４年	6,669		
明治21年	7,337		
明治24年	7,678	3,716	3,962
明治40年	9,548	4,638	4,910
大正９年	11,534	5,751	5,783
昭和10年	14,165	7,539	6,626
昭和25年	19,434		
昭和29年	19,980		
昭和45年	8,474		

単位　（人）
出典：角川日本地名大辞典編纂委員会（編）『角川日本地名大辞典43熊本県』（角川書店）1987年12月、p.181-182をもとに作成

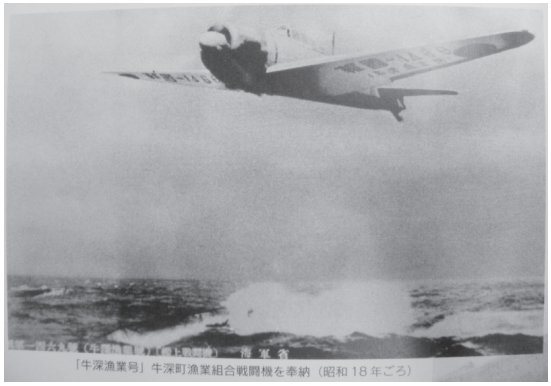

写真４　海軍に奉納した艦上戦闘機

いた。これは牛深だけでなく、天草各地で遊廓に準ずる行為が昔から行われていたことを意味している。だが富岡や津崎のそれは長続きしなかった[62]。

もちろん都市と比べれば牛深の遊廓や経済規模は見劣りしてしまう。だがだからといって牛深や牛深の遊廓が日本の周縁部に位置するものとして過小評価される理由にはならない。牛深は都市を形成しなかったとはいえ、天草諸島や九州西海域の中で漁業、そして交易で発達した場所なのであり、また地元文化を全国に発信した場所でもあったのだ。だからこそ熊本県が遊廓の「営業許可地」を決める際、県内の中でも多数あったであろう候補地の中で牛深を選び、同時期に崎津や富岡にも許可は出されたものの、結局牛深の遊廓だけが経済的に生き残こり、日露戦争以後に数が激減したとはいえ、「売春禁止法」が制定されるまでずっと残り続けたのである。

４．現在

昭和33年（1958）に「売春防止法」が制定され、これによって日本から遊廓が姿を消し、牛深の遊廓も全て店を閉じた[63]。明治の早い段階から行われていた廃娼運動によって遊廓での労働環境は多少改善されはしていたが[64]、前述したとおり国は遊廓との関係が良好であったため、国家レベルで売春や遊廓が禁止されたのはこの時はじめてだった。遊廓があった古久玉には現在スナックが数軒営業しており、普通の民家と思われる建物[65] の玄関にかすれかけの「18歳未満の方はお客として立ち入り出来ません」の札が張っていた場所もあった（写真６）。もちろん「紅裙亭」や「三浦屋」など、もともと遊廓であった建物もかろうじて残ってはいるが、かつての面影はない（写真７）（写真８）。

写真５　現在の古久玉

写真６　民家の玄関の札

62）同時期に牛深の遊廓は12軒もあり、規模がまったく異なる（鶴田文史〔編著〕『天草潮深のふるさと』〔牛深歴史文化遺産の会〕2007年８月、p.333参照）。

63）当時全国に約12万人の公娼がおり、約４万軒の遊郭が存在していた。

64）娼妓の自由廃業（明治５年・1872）や外出の自由（昭和８年・1933）を保障する法令がでたり、一部の県で遊廓が禁止されたりした（明田〔1991〕p.156, 160参照）（西山〔1985〕p.48-49参照）。

65）お店を示す看板が一切なかったため、筆者はその建物は民家と認識した。

写真７　現在の紅裙亭の様子

写真８　現在の三浦屋の様子（五足の靴も訪れた）

牛深の漁業も最盛期に比べて大きく衰退した。イワシの漁獲高が減ったためである。マグロ漁師の浅見さんによると「乱獲」がその原因のひとつだとおっしゃっていた。戦後すぐのころの網は綿糸を用いていたため破れやすく、帰港した後に必ず網を干さなければならなかったが、ナイロンの網が登場したおかげで破れにくくなり、イワシの水揚げ量が大幅に増えた。マグロの場合も漁場によっては釣り上げる間にサメが身を食べてしまい、４、５日でマグロの頭だけで100個ほどたまってしまうほど魚が多かったそうだが、現在は一週間漁に出て10頭ほどしか釣れないそうである。そのため魚の加工業も衰退してしまった。

５．まとめ

なぜ牛深に遊廓があったのかと疑問を抱いた筆者であるが、それは現在名の知れた元遊廓が江戸の吉原や京都の島原など大都市を中心に伝えられており、日本全国に存在していた中小規模の遊廓が忘れ去られてしまっている現状に端を発している。近代化と西洋思想の流入によって、それまでの日本の風俗・風習が否定されたことも忘却に拍車をかけている。しかし藤原公任撰の『和漢朗詠集』（寛仁２年・1018頃成立）の中で「白波の　寄する渚に　世を過ぐす　海人の子なれば　宿も定めず」[66] と詠われているように、海を拠点としていた売春婦は古くから存在しており、名前の知られている大都市タイプだけでなく、牛深のような港町タイプで小規模タイプの存在にも目を向けるべきである。

確かに遊廓で働かされていた女性の多くは生活のため奉公人として連れてこられ、廓主の巧みな罠や仲介人に騙されて遊廓を辞めることができないようにされ、悲痛な叫びを上げながら働かされた挙句、性病などで苦しみながら死んだ人を「投げ込み寺」に手荒く投棄していたことは事実である。もともと高級武士を篭絡させる「社交場」だったものが、明治維新後、「富国強兵から軍事的拡張へとすす〔む〕

66）藤原公任（撰）（菅野禮行訳）『和漢朗詠集　新編日本古典文学全集』（小学館）1999年10月、p.376-377。この詩の作者は不詳。

なかで、男が女を買うことが産業」[67] となり、女性の人間性を否定した機械的な資本主義産業に変わったのである。

本稿の目的は牛深になぜ遊廓があったのかという点を通して牛深の地域史と日本史との関係性を捉えることであり、遊廓そのものやジェンダーの問題についての評価を下すことを目的とはしない。しかし実際に存在したものを消し去ることはできないし、なかったことにすることは決してしてはならない。なぜなら遊廓は日本、そして牛深の近世から戦後までの歴史や社会、経済と深く関わっており、「女性を搾取した負の歴史」や「前近代的な悪習」と一言で片付けてしまい、なかったことにしてしまえば、歴史の真の姿にモザイクをかけてしまうことになる。これでは日本という領域、天草という地域、そして人間の営みなど、そこに住む人々にとって大切なものの中に空洞を作ってしまい、本当の理解をできなくしてしまう。本稿では遊廓という一社会現象を通して牛深の歴史的位置を論じることができた。

本論ではあまり詳しく述べることができなかったが、ヨーロッパ[68] の「娼婦の館（娼館）」と遊廓の比較という視点を加えることは非常に興味深い。キリスト教は売春を禁じながら中世や近代の教会はそれを必要悪として黙認し、たとえ教皇令で禁止しても聖職者ですら自制することができず、そのうえ教会や当局によって運営されている娼館も中にはあった[69]。また傭兵部隊の中にも売春婦が同行しており、強姦などの性犯罪に関してもほとんど裁かれず、裁判になっても富裕層には罰金刑、貧民層には鞭打ち刑に限られ、被害者よりも身分や国の安定統治を優先していた。これらの現象を一つ一つ見ていけば、日本の江戸時代以降の売春事情と西洋の事情の間にそれほど大きな差は感じられない[70]。

港町の遊廓はよそから仕事などでやってきた人たちによって栄えていたことを明らかにしたが、これは現在において出張中の人を狙って「斡旋業者」が宿泊場所に電話をかけたり広告を置いたりするなど形を変えて残っているといって過言ではない。現在においても過去においても、「性ビジネス」には生活圏ではない場所での一時的な夢の世界、ある種テーマパーク的な要素があるのかもしれない。

場所や時代を越えて「性」という問題が社会の中で影に隠されながらも共有されており、一方では天皇や国王との関連性を明示する伝承などを通してプラスに捉えられたり、そのまた一方で不潔なものとして排除されたり、そしてその裏で売春婦を再生産する構造が隠されていたりと、非常に根深く複雑な問題をこのテーマは含んでいる。見えにくいからこそ水面下で発達し、語られにくいからこそ「性のあり方」という問題に大きな進展が見られないという側面があるのではなかろうか。

付記

最後に、われわれに丁寧な説明をして下さった吉川茂文さんや杉浦龍馬さん、インタビューに応じて下さった鯖江要さ

67）永井良和「遊廓の形成と近代日本　――「囲い込み」と取締り――」、井上章一（編）『性欲の文化史１』（講談社）2008年10月、p.33

68）もちろんヨーロッパは一枚岩ではない。この場合のヨーロッパとは「西欧」を指し、具体的には現在のドイツやフランスあたりを対象にしている。

69）浜本隆志、伊藤誠宏、柏木治、森貴史、溝井雄一『ヨーロッパ・ジェンダー文化論　――女神信仰・社会風俗・結婚観の軌跡――』（明石書店）2011年４月、p.125-128参照

70）ジョルジュ・ヴィガレロ（藤田真利子訳）『強姦の歴史』*HSITOIRE DU VIOL*（作品社）1999年８月、p.22-38参照

んと浅見康行さん、そしてわれわれを暖かく迎えて下さった牛深の皆様に感謝の意を示し、この拙著が牛深の歴史や近代史とのつながりなどを理解する一助になれば幸いである。都会で生まれ都会で育ち、祖父母の家も都会である私にとって、牛深を調査するのは得がたい経験であった。

参考資料

書籍・論文：
・笹間良彦『復元　江戸生活図鑑』（柏書房）1995年３月
・下重清「身売り奉公と女性」、薮田貫、柳谷慶子（編）『〈江戸〉の人と身分４　身分のなかの女性』（吉川弘文館）2010年８月
・中野栄三『増補　遊女の生活』（雄山閣）1996年６月
・バーン・ブーロー、ボニー・ブーロー（香川檀、家本清美、岩倉桂子訳）『売春の社会史　――古代オリエントから現代まで――』*Women And Prostitution –A Social History-*（筑摩書房）1991年６月
・松川二郎『全国花街めぐり』（ゆまに書房）2007年２月
・松田唯雄『天草近代年譜』（国書刊行会）1973年９月
・松延眞介「「芸娼妓解放」と陸奥宗光」、佛教大学総合研究所（編）『佛教大学総合研究所紀要』第９号（佛教大学総合研究所）2002年３月
・南博（編代表）『近代庶民生活誌　第13巻』（三一書房）1992年３月
・新編　色道大鏡刊行会（編）『新版　色道大鏡』（八木書店）2006年７月

（語順別）

図版出典
写真１……苓北町漁業組合所蔵中元家文書６「天草郡中舸子控帳　裏方稼場取調子并高浜鰯仕立ニ付引合扣　一切永代萬覚心得日記荒方書状扣　富岡浦方」（2010年７月関西大学天草フィールドワーク調査にて撮影）
写真２、３……吉川茂文『写真集　牛深今昔』（熊本日日新聞情報文化センター）2000年７月、p.91
写真４　……同上書、p.84
写真５～８……筆者撮影